



なしの実

フランスの小さな村の農家に生まれたアンリは、毎日、弟のフレデリックと仲良く遊んでいました。アンリの家はまずしく、好き^すなものを買ってもらえるゆとりはありませんでした。

そんなある日のことです。アンリが学校から帰ってくると、フレデリックが待ちかまえており、家のうらに引っぱっていかれました。そこには、太くて大きな木が一本高くそびえています。そして、少し低いところに、となりの家のなしの木のエダがのびてきていました。そのエダには、今にも折れ^おそうなほど、たくさんのなしの実がついています。

「ねえ、とつてよ。ぼく、おなかがすいているんだ。」

フレデリックは、アンリにせがみました。

「ええっ、とるのか……。」

アンリは、こまった顔でフレデリックの方を見ました。

「お兄ちゃん、あんなにたくさんなっているんだから、少しぐらいとつても、わからないよ。」

フレデリックは、もう、とりたくてしかたがありません。

「でも、見つかったらどうするんだ。」

「お兄ちゃん、だいじょうぶだよ。だれも見えてないもん。」

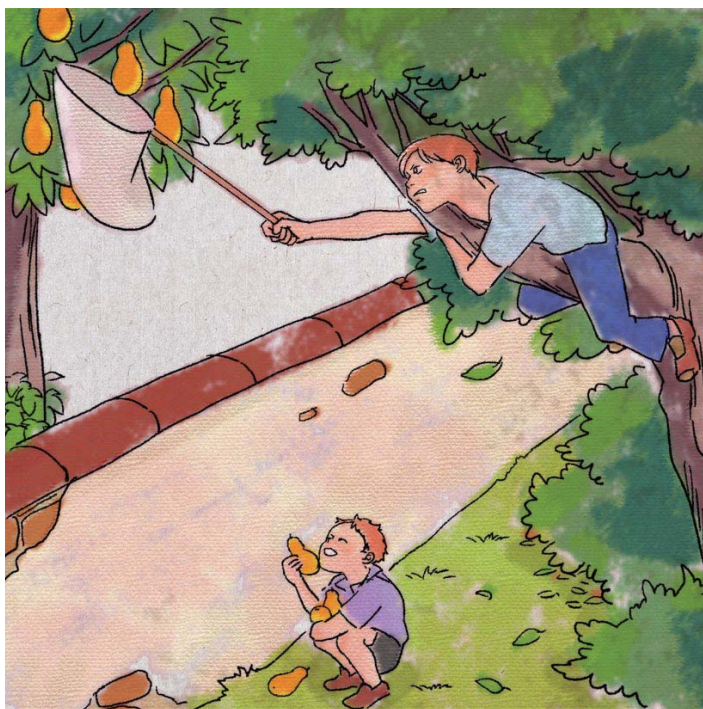
弟にせがまれてアンリは、だれもないことをたしかめると、目の前の大きな木に登り始めました。太い横えだのところにくると立ち上がり、えだ先の方へ、おそろおそろ進みました。

しかし、いくらこしをかがめても、なしの木までは手ごとどきません。すると、

「お兄ちゃん、これでとったら。」

と、フレデリックが、虫とりあみを持って来ました。

アンリはそれで一つ、二つと、なしの実をとっては、下にいるフレデリックに落としました。フレデリックは大喜びです。しばらくすると、なしの実はいっぱいとれました。でも、アンリは、何となくすっきりしませんでした。



その夜のことです。夕食を終えたアンリは、なしをとったことが見つからないかと気にしながら、部屋で本を読んでいた。すると、台所の方からお父さんのよぶ声が聞こえてきます。

行ってみると、お父さんは、こわい顔をしていすにすわっていました。

「アンリ、今、お母さんから聞いたんだが、うらのゴミすて場になしの食べかすがいくつも転がっていたそうだ。いったいどうしたんだ。」

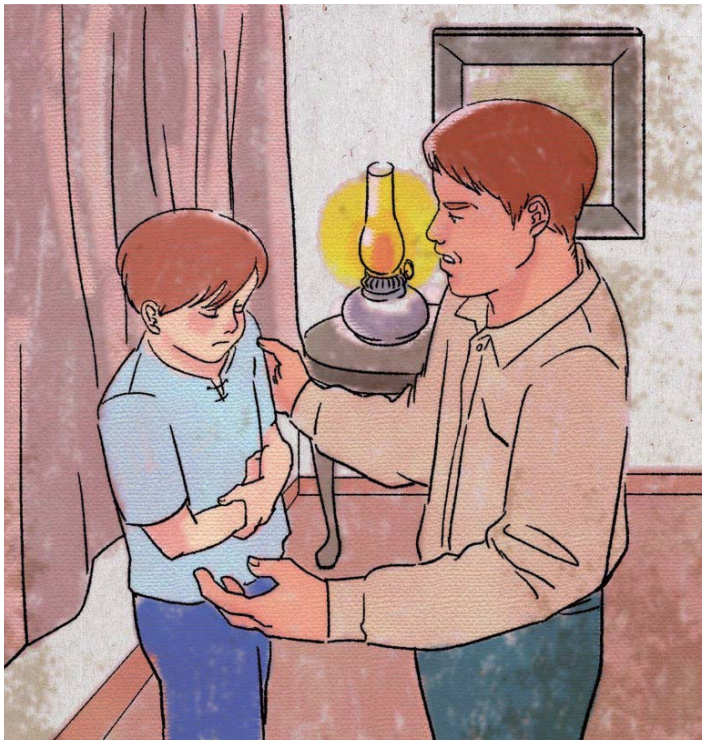
アンリは、はっとしたまま、うつむいてしまいました。

「なぜ、だまっているんだ。」

アンリは、ただうつむくだけでした。

しばらくすると、アンリをじっと見ていたお父さんは、

「アンリ、お父さんやお母さんは、おまえたちがいつも明るくすなおな気持ちでいてくれるようにといのっているんだよ。私たちにとって、おまえたちは自まんの息子なんだ。家がまずしいことは、本当にすまないと思っどうている。しかし、だからこそ明るく堂々と生きて



ほしいんだ。」

と、ゆっくりさとすように話し始めました。

アンリの目には、うっすらと涙みだがうかんできました。そして、お父さんの話がまだ終わらないうちに、

「お父さん、ごめんなさい。ぼく、となりの家の……。」

と、体をふるわせながら言い出しました。それをじっと聞いていたお父さんは、いすから立ち上がり、

「アンリ、よく言ってくれたね。お父さんはうれしいよ。あした、フレデリックといっしょに、おとな

りの家にあやまりに行こう。」

と言って、アンリのかたにやさしく手をのせました。アンリは、こらえきれなくなり、お父さんのむねにとびこんでいきました。

アンリは、この日のことを一生わすれることができませんでした。

(浅田 俊夫)